

ヨブ記40-42章「全能者への敗北宣言」

1A 全能者の義 40

1B 高ぶる者の征服 1-14

2B 第一の獣 15-24

2A レビヤタンの力 41

1B 無力な人間 1-11

2B 獣の王 12-34

3A 忍耐の末の憐れみ 42

1B 悔い改め 1-6

2B 和解と回復 7-17

本文

ヨブ記 40 章を開いてください。神は、ヨブに対して嵐の中で現れました。そして、地の基と、海の淵、天における嵐の現象について話し、それから野生の動物について話しました。そこから神は、ヨブが天や地のことについて何も知らない、また野生の動物については自分で監督していないことを知らせました。自分は全く神に拠り頼んでいるものであり、自分が管理しなくても、勝手に物事は動いています。神の御手があるからです。

前回私たちが学んだのは、私たち人間は時に、神と人間との境界線を忘れてしまうということです。神から被造物を支配するように任されたのですが、あくまでも自分は同じ被造物であり、その意味では動物と変わらず、神に完全に服さなければいけない存在なのです。ところが管理を任されているので、まるで自分が神と同じような存在と誤ってしまいます。神と同じようにすべての事を知る必要があり、その原因も探らなければいけないと思います。そして、すべてに善悪の判断をしなければいけないと思って、争うのです。しかし、動物を見てください、完全に神に拠り頼んでいる、神に服している姿を見ます。人間も本来、そうであるべきなのです。

しかしヨブの友人三人は、その原因探しをしてヨブが罪を犯したと責めました。そしてヨブ本人は自分に見の覚えがないので、その原因を神に求め、神を責めたのです。ヨブ記の最後は、神に原因を求めることをやめ、神に降参して、神のご計画に自分の身をゆだねる彼の悔い改めの姿を読むこととなります。

1A 全能者の義 40

1B 高ぶる者の征服 1-14

40:1 主はさらに、ヨブに答えて仰せられた。40:2 非難する者が全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それを言いたててみよ。40:3 ヨブは主に答えて言った。40:4 ああ、私はつまらない

者です。あなたに何と口答えできましょう。私はただ手を口に当てるばかりです。40:5 一度、私は語りましたが、もう口答えしません。二度と、私はくり返しません。

ここの文章を読んでいかがでしょうか？神が現れて、ヨブをこてんぱんに叱りつけ、それで恐れで震えているヨブの姿を思うでしょうか？私は違うように読みました。ここには、神とヨブの間にある深い信頼関係が見えます。つまり、ヨブがあれだけ神と天幕の中で交わり、それによって大きな祝福を受けてきた。それが今なくなってしまった、とヨブは嘆いたことがあります。今、まるでヨブの苦しみを象徴しているかのような嵐の中で、神ご自身が現れてくださっているのです。そして愛情を込めて、神は信頼しているヨブにまっすぐに語られているのだと思います。そしてヨブの返答も同じです。これは、怖いから口を出さないということではなく、かなり納得したから口を出さないと、自ら進んで言っている、ある程度満足した心で言っていることなのでしょう。ただ、さらに 6 節以降で、神はヨブに対する問い質しを続けられます。

ヨブは、もう口答えしないとやっているにも関わらず、それでも語り続けられるのは、どうしてなのでしょう？ここは、ある注解の解説が非常に興味深く、私もうなずいてしまいました。その鍵は、「手を口に当てるばかりです」という行為にあります。もし手を口に当てなければ、「なぜですか！なぜですか！」と畳みかけて、問いかけてしまうかもしれないから、それを自制するために口を当てたのではないか、ということです。つまり、「分かりました、でも・・・」という思いは残っていたのでしょう。そこで、心の奥のすべてを知り尽くしておられる神は、まだ中途半端になっているヨブの心を正すために、続けて問いかけをされているものと思います。

聖書を読んでいると、イエス様の言葉に時々、「なぜ、そんなことを突然、おっしゃるのか？」「しつこいのではないか、相手は分かったと言っているのに。」と感じることがあります。けれども、心の中ではまだ、それは受け入れられませんかよと思っている相手をイエス様は見ておられるからです。イエス様は、「まことに、まことに」という前置きを付けて語られることが多いですが、心がまことに神のものになる時まで、神は私たちに問いかけておられます。要は、私たちは心を神に注ぎ、また神によって心を砕いていただかなければならないのです。

40:6 主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。40:7 さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。40:8 あなたはわたしのさばきを無効にするつもりか。自分を義とするために、わたしを罪に定めるのか。

38 章では、神のヨブに対する問いかけは、「摂理(経綸)を暗くする」ということでした。神の思い計らいがあるのに、自分の言い分を述べ立てて、その深い配慮を見えなくさせてしまっていることを責めておられました。そこで、ヨブが神のなされていることについて、全く無知であることをお語りになったのです。次、ここからは神を不義とするという問題を取り上げておられます。自分は正しいのに、なぜこのような苦しみに遭わなければいけないのか、なぜこのような災いが私に降りかから

なければいけないのか。こうやって悲惨な目にあっているのは、神のせいだとヨブはしていました。

40:9 あなたには神のような腕があるのか。神のような声で雷鳴をとどろき渡らせるのか。40:10 さあ、誉れ、気高さを身に装い、尊厳と威光を身につけよ。40:11 あなたの激しい怒りを吐き散らし、すべて高ぶる者を見て、これを低くせよ。40:12 すべて高ぶる者を見て、これを押え、悪者どもを、その場で踏みにじれ。40:13 彼らを共にちりの中に隠し、その顔を隠れた所につなぎとめよ。40:14 そうすれば、わたしはあなたをたたえて言おう。あなたの右の手があなたを救えると。

嵐の中で今、主が語られています。そして神は、「高ぶる者」に対して力を現してみよ、と言われてます。神は、高ぶる者、あるいは悪の大きな力に対して怒りをぶつけて、それでそれを何とかできるものならやってみろ、と言われてています。ヨブの身に起こった悪いことについて、神があたかもそれを治めていないかのようにしているとヨブは感じていたのです。しかし、神はご自分のされていることを分かっておられます。悪をさえ、力強い御手で抑えておられます。(ここに「右の手」とありますが、力と権威を象徴しているものです。)そこで神は、陸と海における怪物を取り上げられます。

2B 第一の獣 15-24

40:15 さあ、河馬を見よ。これはあなたと並べてわたしが造ったもの、牛のように草を食らう。40:16 見よ。その力は腰にあり、その強さは腹の筋にある。40:17 尾は杉の木のように垂れ、ももの筋はからみ合っている。40:18 骨は青銅の管、肋骨は鉄の棒のようだ。40:19 これは神が造られた第一の獣、これを造られた方が、ご自分の剣でこれに近づく。

「河馬」と訳されているヘブル語ですが、新共同訳はそのまま「ベヘモット」としています。果たして河馬なのかどうか、と言いますと、そのように見えない描写があります。尾が杉の木のように垂れている、というところが河馬と合致しません。続けて読んでいくと分かりますが、これは草食恐竜ではないかと考える人たちがいます。私もそうなのではないか、と思います。そうだと思って読み直しますと、その描写がぴったりと来ます。そして、私たちの知っている動物で、恐竜ほど制しがたいものはなかったと思います。第一の獣、と主が言われました。

興味深いのは15節で、「あなたと並べてわたしが造ったもの」とあることです。その後で草を食らう、と言われていますが、天地創造の六日目に神は陸に動物を造られ、同じ日に人を造られました。そしてその時は、どの動物も草だけを食べていました。「あなたと並べて」と主が言われているのは、人と並べてということかもしれません。このことは、進化論者は否定します。恐竜の時代があって、そのはるか後に人間が現れたと信じているからです。けれども、創造の記述は動物も人間も同じ六日目に造られました。

それでヨブにとっては、生々しいその巨大な恐竜が人間にとってどうにもならない存在であったことはよく知っていました。ヨブの時代には生きていなかったのかもしれませんが、口伝によってそ

の恐ろしさを聞いていたのでしょう。あるいは、ヨブの時代にも生きていたのかもしれませんが。いずれにしても、人は生きていくことができたのです。なぜなら、神ご自身が19節、「ご自分の剣でこれに近づく」ことをされていたからです。どのような形だったのでしょうか？突然死したのでしょうか、よく分かりませんが、恐竜が倒れていくのを知っていたのでしょうか。つまり、人間にはどうしてもできない怪物だけれども、神は抑えつけておられるということです。ここが、神がヨブに伝えたかったことです。

40:20 山々は、これのために産物をもたらし、野の獣もみな、そこで戯れる。40:21 彼ははずの下、あるいは、葦の茂みや沼に横たわる。40:22 はずはその陰で、これをおおい、川の柳はこれを囲む。40:23 たとい川があふれても、それはあわてない。その口にヨルダン川が注ぎ込んでも、動じない。40:24 だれがその目をつかんでこれを捕ええようか。だれがわなにかけて、その鼻を突き通すことができようか。

ベヘモットがいると、山一つが彼のために存在しているようなもので、産物が彼のために与えられると言えるぐらい大量に食べるのでしょう。そして、ベヘモットの存在で他の野の獣の生態も決められていったようです。そして、蓮の下、葦の茂みや沼に横たわっています。川が溢れてきても、それによって動かされることのないほど重く、巨大なのです。そして神は、これを人が捕獲することができるのか？と問い質しておられます。

私は、この箇所を読んだので、改めてかつて鑑賞した映画「ジェラシック・パーク」の一部を見ました。恐竜を飼育しているような公園なのですが、制御できなくなりました。一切、彼らには太刀打ちできない姿をよく表現していました。私たちにあって、今、獰猛な獣と言えど熊がいますが、熊としては、「お前、どうしたんだ？」と肩たたきをしているような腕力で私たちを叩いたら、私たちは引き裂かれてしまうほどのものすごい力である訳ですが、ましてや恐竜は、ひとたまりもなかったことでしょう。しかし、恐竜もをさえ神は制しておられたのです。

私たちの世界には、このように決して抗うことのできない強い力があります。そしてその多くは、悪の力です。自分たちでは、どうにもならないのです。では、そこで神が何もしていないと私たちは非難するのでしょうか？いいえ、神はしておられるのです。私たちに分らないだけです。そして、悪があるなら何もしていないではないか、と感じるのです。しかし、神はベヘモットをお見せになって、確実に悪をご自分の手の中で抑えつけておられることを現しているのです。

2A レビヤタンの力 41

そして主は、レビヤタンをお見せになります。

1B 無力な人間 1-11

41:1 あなたは釣り針でレビヤタンを釣り上げることができるか。輪縄でその舌を押えつけることが

できるか。41:2 あなたは葦をその鼻に通すことができるか。鉤をそのあごに突き通すことができるか。

主が取り上げられる最後の獣、そして怪物は、レビヤタンです。すでにヨブ自身が、二度、レビヤタンに言及していました。「日をのろう者、レビヤタンを呼び起こせる者がこれをのろうように。(3:8)」この怪物レビヤタンを呼び起こせる力があるなら、その力をもって生まれた日を呪うことができるように、ということです。そして26章12-13節、「神は御力によって海をかき立て、神の英知をもってラハブを打ち砕く。その息によって天は晴れ渡り、御手は逃げる蛇を刺し通す。」ラハブという別称がありますが、レビヤタンと同一であることは他の聖書箇所から分かります。海にいる怪物であります。

レビヤタンの元々の意味は、「捻じ曲げるもの」です。この獣の正体を探るために、他の箇所も調べてみましょう。「確かに、神は、昔から私の王、地上のただ中で、救いのわざを行なわれる方です。あなたは、御力をもって海を分け、海の巨獣の頭を砕かれました。あなたは、レビヤタンの頭を打ち砕き、荒野の民のえじきとされました。(詩篇 74:12-14)」この箇所から、天地創造の時にいたこの海の怪獣を神がその頭を打ち砕いたように読むことができます。けれども同時に、海を分けて、荒野の民の餌食としたと言っていますが、これは出エジプトの記述のようにも見えます。実は、ここに二つの意味が隠れています。一つは、実在の海の巨獣で天地創造の時に神から何らかの裁きを受けたということ。もう一つは、イスラエルの民を追跡するエジプトは、実はその巨獣を通して自分を表していたサタンの姿である、ということです。エジプトは神に対して高ぶり、神の民を虐げていましたが、その背後にサタンがいた、ということです。

詩篇 104 篇 26 節を見てください。「そこを船が通い、あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます。」人の乗る船が海を行き来している時に、レビヤタンもそこにいたということです。ですから、人類の最近の歴史にも存在していたということになります。

そしてイザヤ書 27 章 1 節が、この海の怪獣の正体をさらに明らかにしています。「その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」レビヤタンが蛇と呼ばれ、そして竜とも呼ばれています。そしてこのイザヤ書の箇所の前を読みますと、終わりの日、イスラエルが大患難を通して救われる話の後に出できます。そうです、まさに主イエス・キリストが地上に戻ってこられて、そこでサタンが鎖に縛られること、その最期の殺されることを預言している箇所なのです。「彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない。(黙示 20:2-3)」蛇とも呼ばれ、竜とも呼ばれるこの怪獣に、サタンが現われたということなのです。

他の箇所も眺めてみます。「さめよ。さめよ。力をまとえ。主の御腕よ。さめよ。昔の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。(イザヤ 51:9)」竜であり、そしてラハブと呼ばれます。ラハブの意味は「高ぶる者」ですが、ここでは出エジプトが背景にありますから、先ほど申し上げたようにエジプトの背後にサタンがいて、神の民を滅ぼそうとしているのです。黙示録 12 章に出てくる、古い蛇、竜、サタンと呼ばれるものが、イスラエルを表している女を示していることから、レビヤタンの存在は竜であり、そして悪魔が竜によって現れることを表しているのです。

これから読むところから分かるのは、実に竜の描写に似ているのです。けれども、竜は神話の中に出てくる怪物ではないか、と思われると思います。しかし、聖書では実在の獣として書いています。世界中に、どの文化においても竜がいるということは、かつては実在していたのではないかと思います。しかも人類の比較的最近までいたのではないかと思います。

41:3 これがあなたに、しきりに哀願し、優しいことばで、あなたに語りかけるだろうか。41:4 これがあなたと契約を結び、あなたはこれを捕えていつまでも奴隷とすることができようか。41:5 あなたは鳥と戯れるようにこれと戯れ、あなたの娘たちのためにこれをつなぐことができるか。41:6 漁師仲間はこれを売りに出し、商人たちの間でこれを分けるだろうか。41:7 あなたはもりでその皮を、やすでその頭を十分に突くことができようか。

どのような形にしろ、レビヤタンを人が制することは決してできないということです。優しいことばをかけても手なずけることはできません。我々は多くが、戦いのある時に話し合いさえすれば互い分かり合うではないか、という甘い考えがあります。しかし、悪というものはそれを許さないのです。また4節では契約を結ぶ、とありますが、他の動物であれば何らかの手法で意思伝達をして、ちょうどサーカスの動物のように手なずけることができます。しかし、レビヤタンにはその手法がありません。人間の世界だって同じです、約束事をしっかり結べば、国の間で条約を結ぶことができれば平和が来るなど考えます。そしてもちろん、レビヤタンを愛玩動物のように手なずけることはできないし、またペットと同じように売り買いすることもできません。ジェラシック・パークの映画は、まさに恐竜をペットにできるという人間の愚かさを風刺した内容です。

ここで主が語られていることは、人は悪に対して自分が制することができるというのは幻想なのだ、ということです。そして、それでも制御の利かない災いがあると、なぜできないのだと言って、嘆き、責め立て、嘲笑います。しかし、自分自身はどうなのでしょう？ 悪を制することができるのでしょうか？ いいえ、全く無力なはずです。「すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。(ローマ 3:12)」しかし、唯一、制することのできる方がいます。

41:8 その上にあなたの手を置いてみよ。その戦いを思い出して、二度と手を出すな。41:9 見よ。

その望みは裏切られる。それを見ただけで投げ倒されるではないか。41:10 これを起こすほどの狂った者はいない。だから、だれがいったい、わたしの前に立つことができよう。41:11 だれがわたしにささげたのか、わたしが報いなければならないほどに。天の下にあるものはみな、わたしのものだ。

かつて、レビヤタンに手を置いて人は戦いをしたのだと思います。ところが、投げ倒されてしまいました。これを再び、呼び起こすという狂ったことはしないでだろうと主は言われます。竜に表れている、サタンの存在は恐ろしいものです。私たちは悪魔に対してただ翻弄されるばかりで、何ら自分たちの力で変えることはできません。パウロは、「この世の神」と悪魔を呼びました。しかし、唯一、ご自分の足でその頭を踏み砕くことのできる方がいて、それが私たちの信じている主イエス・キリストであります。そして父なる神こそが、レビヤタンをご自分の手中に完全に治めておられる方なのです。

ですから、神は言われるのです。「だから、だれがいったい、わたしの前に立つことができよう。」唯一、悪魔に対して打ち勝つことのできる、神の御子イエス・キリストに信頼するだけだろう。どうして、自分たちで悪に対して、こうだあだと論評するのか。立場があべこべだ。「あなたが神なら、こうすべきだ、ああすべきだ。」と言うのだが、あなたが神で、わたしが人なのか、ということをここで主は言われています。

2B 獣の王 12-34

41:12 わたしは彼のおしゃべりと、雄弁と、美辞麗句に黙っていることはできない。

ここは、他の訳ではまったく違った内容となっています。例えば新共同訳ではこうなっています。「彼のからだの各部について／わたしは黙ってはいられない。力のこもった背と見事な体格について。」レビヤタンの体の部分について、主は語り始めます。

41:13 だれがその外套をはぎ取ることができるか。だれがその胸当ての折り目の間に、はいれるか。41:14 だれがその顔の戸をあけることができるか。その歯の回りは恐ろしい。41:15 その背は並んだ盾、封印したように堅く閉じている。41:16 一つ一つぴったりついて、風もその間を通らない。41:17 互にくっつき合い、堅くついて離せない。

ちょうど鱧のような皮膚の堅さを持っています。ここの描写をもってレビヤタンは鱧であると言う人たちが多いです。しかし、18節以降の描写が竜でしかないことを教えます。

41:18 そのくしゃみはいなずまを放ち、その目は暁のまぶたのようだ。41:19 その口からは、たいまつが燃え出し、火花を散らす。41:20 その鼻からは煙が出て、煮え立つかまや、燃える葦のよ

うだ。41:21 その息は炭火をおこし、その口から炎が出る。

そうです、まさに私たちの知っている、火を口から吹く竜の姿があります。黙示録 12 章にも、竜は、大きな赤い竜とあり、火を噴くような竜ということです。これは、争いの火であり、戦争のゆえに真っ赤になる火のことであり、さらに地獄からの火と言ってもいいです。

41:22 その首には力が宿り、その前には恐れが踊る。41:23 その肉のひだはくっつき合い、その身にしっかりついて、動かない。41:24 その心臓は石のように堅く、臼の下石のように堅い。

全く攻撃できる隙間がなく、心も石のように堅いです。柔和さや愛とは正反対の存在ですね。柔和な人は、人から容易に責められます。愛のある人は、心が傷つきます。しかしその反対がこの世であり、レビヤタンなのです。

41:25 それが起き上がると、力ある者もおじけづき、ぎょっとしてとまどう。41:26 それを剣で襲っても、ききめがなく、槍も投げ槍も矢じりもききめがない。41:27 それは鉄をわらのように、青銅を腐った木のようにみなす。

41:28 矢もそれを逃げさせることができず、石投げの石も、それにはわらのようになる。41:29 こん棒をもわらのようにみなし、投げ槍のうなる音をあざ笑う。41:30 その下腹は鋭い土器のかけら、それは打穀機のように泥の上に身を伸ばす。

戦いに臨んでも、全く立ちゆかない存在です。海の岸部のところはやってくるのでしょう、泥の上に脱穀機のように身を伸ばしています。

41:31 それは深みをかまのように沸き立たせ、海を香油をかき混ぜるなべのようにする。41:32 その通ったあとは輝き、深い淵は白髪のように思われる。

海の深みを泳いでいく時に、海がどのようになるのかを話しています。普段なら静かにしか動かない深海の流れが、レビヤタンが動くとき香油をかき混ぜるようになり、白髪のように泡立つということです。これは人間の悪、またあらゆる災い、国々の騒ぎなど、その底流に流れているものの姿を表しています。普段は静けさを保っていても、何かが起こるとこのように騒ぎ立つのです。その混乱と恐れの後には、悪魔の存在がいます。

41:33 地の上には、これと似たものはなく、恐れを知らないものとして造られた。41:34 それは、すべて高いものを見おろし、それは、すべての誇り高い獣の王である。



「すべての誇り高い獣の王」つまり、高ぶりの王であります。ここで主は、1章と2章でご自分がサタンと話して、何をしておられたのか明かすことはされていないものの、ヨブに降りかかった災いを明らかにご自分の手の中に入れておられることを明らかにしておられるのです。悪魔は神のものなのです。悪魔は神とその秩序に反抗していますが、神は完全に彼を掌握しておられるのです。

悪魔が働いていたエジプトのパロに対して、「わたしがパロの心をかたくなにする。」と言われた時も同じ働きをしておられました。悪がはびこっても、気落ちしてはいけません。なぜなら、それをも神が主権の中で動かしておられるからです。だから安心なのです、そして判断を主に委ねて、主に信頼していればよいのです。

3A 忍耐の末の憐れみ 42

1B 悔い改め 1-6

42:1 ヨブは主に答えて言った。

ヨブは、法廷を想定して、神と対等に論じ合いたいと言って、神に尋ね求めました。けれども、神はヨブに対して尋問を続けてこられました。そしてヨブは、神の尋問に対して先に「口答えをしません」とだけ言いました。しかし、まだ心は神に完全に開いていなかったのです。次に神に対して心を開くこととなります。

42:2 あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。

このことを知ることは、魂に安らぎを与えます。主が悪も含めて、自分の思いをはるかに超えたところでご自分の計画を行われていることを悟ることです。完全に神に魂をゆだね、明け渡します。

42:3 知識もなく、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。

ヨブは、自分の受けている災いについて、ああだこうだと言って知識を振りかざしました。しかし、そのことによって神のご配慮、思い計っておられることを暗くしてしまったのです。

42:4 どうか聞いてください。私が申し上げます。私はあなたにお尋ねします。私にお示してください。

42:5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。

私たちに必要なのは、説明ではありません。回答ではありません。私たち人間はあまりにも、知りたがろうとします。しかし、この魂は知ることでなく、「神がおられる」ということによって癒しを受けるのです。そして、神がおられるということによって、神に信頼しているところに完全な解答があ

ります。神は神であり、私たちは神の事柄を知りつくすことはできません。しかし、全能で全知の神にゆだねるということはできます。それによって、私たちはただ神に感謝して、賛美するのです。

42:6 それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

ヨブの敗北宣言です。自分が神に問い続けましたが、ついに解答を得ることなく降参しました。しかし、これこそが勝利宣言なのです。サタンが退く決定打は、神の前で自分が負けであることを認めることです。神に服することです。「神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたから逃げ去ります。(ヤコブ 4:7)」ヤコブも同じもがきがありました。彼はふとももの関節が外されて、主の使いに敗北した時、主は「イスラエル」つまり、「神の勝利」と名づけられました。

2B 和解と回復 7-17

42:7 さて、主がこれらのことばをヨブに語られて後、主はテマン人エリファズに仰せられた。「わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。それは、あなたがたがわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったからだ。

主は、友人三人に言葉をかけられます。その最年長エリファズを代表にして、彼らの言葉を咎められています。ここはとても重要な点です。友人たちが、神について真実を語らなかったと神は言われます。それに対して、ヨブは真実を語ったと言われるのです。しかし、今さっき、ヨブが悟りえないことを告げたと神に告白しました。なぜ、ヨブは真実を語り、友人たちはそうではないと神は責められたのでしょうか？これはひとえに、心の姿勢のことを話しているのだと思います。

ヨブは、自分の受けている苦しみに対して、そのありのままを語りました。その言葉が激しかったとしても、自分の心の内を偽らずに打ち明けました。反面、ヨブの友人たちは、罪を犯した者が災いに遭うという知識を彼に当てはめました。その知識そのものは正しいです。罪を犯して悔い改めない者は、災いに遭い、滅びます。しかし、ヨブは何度もそうではないと訴えました。それに耳を貸さず、苦しみについて少しも分かっていないのに、分かっているかのように語り続けました。ですから、語っていることは正しくてもそこには真実がなかったのです。

ある人がこう言いました。「私は、誤った態度で正しいことを言うよりも、正しい態度で誤ったことを言うてしまうことのほうを選びたい。」正しい態度で誤ったことを言うならば、その過ちを他人から指摘された時にすぐに正すことができます。けれども、誤った態度で正しいことを言っているならば、その態度を変えるのは非常に難しいのです。

42:8 今、あなたがたは雄牛七頭、雄羊七頭を取って、わたしのしもべヨブのところに行き、あなたがたのために全焼のいけにえをささげよ。わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈ろう。わた

しは彼を受け入れるので、わたしはあなたがたの恥辱となることはしない。あなたがたはわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったが。」

ここで素晴らしいのは、神が和解の道を与えておられることです。神は、友人たちをもこよなく愛しておられます。ゆえに、彼らもまた神との関係を回復してほしいと願われて和解の方法を教えておられます。ヨブのところに行き、これらの全焼のいけにえを捧げなさいと言われます。もちろんヨブに対して、これらのいけにえを携えるのではありません。友人たちは、神に対して罪を犯したのです。したがって神に赦しを得るのですが、それをヨブの前で行なうのです。つまり、ヨブに対して語った言葉について、彼が誤った神の概念をヨブの心に植えつけことについて、彼に謝るために行ないます。

そして 7-8 節にて、主はヨブを「わたしのしもべ」と呼ばれています。これはモーセに対しても神が使われた、名誉ある呼び名です。なぜならヨブは、最後まで神を呪うことをしませんでした。神に対して疑いを投げかけましたが、神を呪いはしませんでした。ここに彼の真実がありました。しかも、彼は悔い改めました。自分が正されることを恐れませんでした。

42:9 テマン人エリファズと、シュアハ人ビルダデと、ナアマ人ツォファルが行って、主の彼らに命じたようにすると、主はヨブの祈りを受け入れられた。

ヨブが彼らの罪の赦しのために、執り成します。これはヨブにとっても勇気の要ることです。自分を激しく罪ある者として、偽りの告発をしました。しかし、罪の赦しを請うているのですから、神の權威に従って、その罪を赦さなければいけません。「私たちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。(マタイ 6:12)」これから神は、ヨブに慰めを与えられますが、それはヨブが神の前で悔い改め、また友人がヨブのところに行き和解をしたというところに基づきます。これから与えられるヨブに対する富は、これらの神の憐れみが目で見える形で現われたものです。

42:10 ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブを元どおりにし、さらに主はヨブの所有物をすべて二倍に増された。42:11 こうして彼のすべての兄弟、すべての姉妹、それに以前のすべての知人は、彼のところに来て、彼の家で彼とともに食事をした。そして彼をいたわり、主が彼の上にもたらしたすべてのわざわいについて、彼を慰めた。彼らはめいめい一ケシタと金の輪一つずつを彼に与えた。

主が元に戻されたら、これらの兄弟姉妹や知人がやって来ました。私は彼らと比べると、ヨブの友人三人ははるかに優れていると思います。病んでいたヨブのところにとずっと共にいたのです。友人たちがこのような憐れみを持っているゆえに、私はかえって神は彼らに厳しく臨まれたのだと思います。それだけの叱責を受けてもそれを受け入れるへりくだりがあると、神は友人たちをも知っ

ていたのではないかと思います。

いずれにしても、多くの人たちがヨブのところに戻ってきました。ある意味で苦しみの時にはいなかった現金な人々です。しかし、ヨブはそうしたことをも神の慰めの中であまり気にしていませんでした。たとい現金な態度であろうと、それは良しとするとしていたのではないかと思います。主の慰めが与えられた今、そのようなことは構わないという寛容が与えられていたのでしょうか。

42:12 主はヨブの前の半生よりあとの半生をもっと祝福された。それで彼は羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。

神は、慰めとして二倍の祝福を与えられました。1章を読むと、それぞれ羊七千頭、らくだ三千頭、そして牛五百くびきでした。これが、神の慰めの方法です。「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」(イザヤ 40:1-2)」

なぜ二倍なのか？失われたものを補うだけで不十分なのか？そうですね、神は私たちが受けた損失に対して、それを埋めるだけでなく、プラスに働かせてくださるのです。私たちが受けた損失がマイナス百であれば、神はプラス百を与えてくださいます。それが、神が恵みによって、私たちが義と認めてくださることです。罪によって私たちは死ぬものとなりました。しかし、神は罪を赦して帳消しにしてくさるだけでなく、キリストの義を身につけることによって、キリストのように神の前に正しいとみなされるようになったのです。

42:13 また、息子七人、娘三人を持った。42:14 彼はその第一の娘をエミマ、第二の娘をケツィア、第三の娘をケレン・ハプクと名づけた。42:15 ヨブの娘たちほど美しい女はこの国のどこにもいなかった。彼らの父は、彼女たちにも、その兄弟たちの間に相続地を与えた。

この三人の娘について書かれているのは、父としての誇り、悲しみを喜びに変えた神の御業を強調しています。そして驚くべきは、彼女たちにも相続地を与えていることです。モーセの律法では、受け継ぐ男がない時に娘が受け継ぐ特例は定めていました(民数 27:8)。

42:16 この後ヨブは百四十年生き、自分の子と、その子の子たちを四代目まで見た。42:17 こうしてヨブは老年を迎え、長寿を全うして死んだ。

もしヨブが苦しみを受けた時が七十歳だとしたら、彼は二百十年生きたことになります。そして四代目まで見たということもうなずけます。これも族長時代に与えられた神の祝福であり、ヨブが大いに神から報いを受けていることを伺うことができます。

これについて、ヨブ記を読み終わりました。しめくりは、もちろんヤコブの言葉です。「苦難と忍耐については、兄弟たち、主の御名によって語った預言者たちを模範にきなさい。見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。(ヤコブ 5:10-11)」ヨブ記を通して、私たちが受けるあらゆる苦しみについて、それでも勇気が与えられる書物ですね。彼ほどの苦しみ、つまり正しいと言われているのにこれだけの苦しみを受けることはないからです。